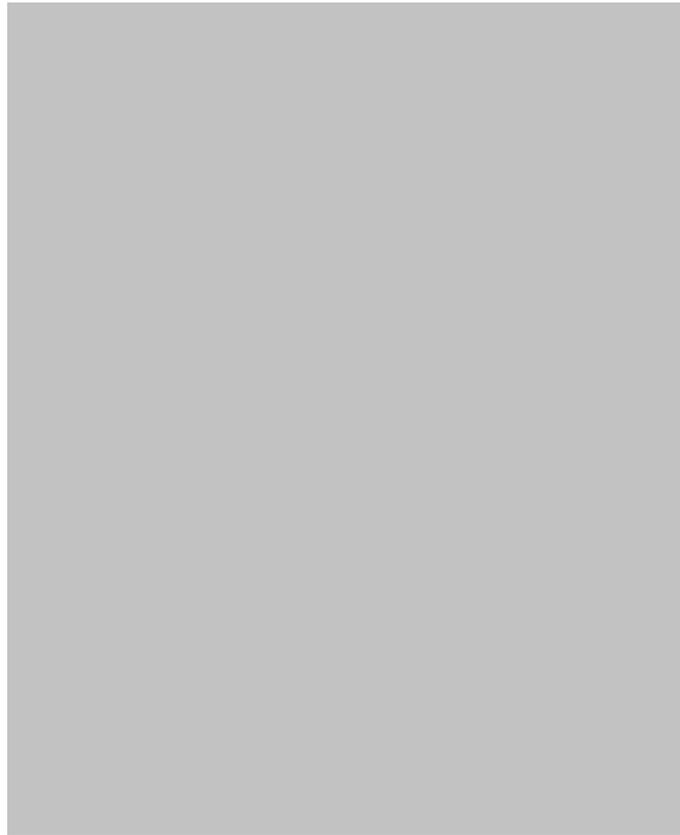


# 長野埴志

## 《鷹置物》



長野埴志(1900-1977)  
《鷹置物》

1955-59年頃  
青銅、鑄造  
高さ19.1, 幅13.8, 奥行き8.3 cm  
平成27年度寄贈  
撮影:アローアートワークス

### 太

い足に鋭い爪を携えた両足で地面にしつかりと立ち、翼をたたくで胸を張る鷹は、少し左に首を傾け静かな眼差しで空を見上げています。目の上の膨らみから落ちる影と瞳を縁取る稜線が、視線に鋭さを生み、嘴の境に軽く引かれた線は、口元を凛々しく引き締めています。その表情は、今日を生きる鷹の野性を宿しているかのようです。本作《鷹置物》は、鑄金家・長野埴志による青銅の鑄造作品です。実際の鷹を写真的に再現するのではなく、鷹の体で印象的な部分である、鋭い爪や嘴、太い足、交差する翼などの僅かな要素を残し、他を削ぎ落とすことで、鷹が象徴的に表現されています。

一九〇〇年代、アール・ヌーヴォーやアール・デコ、未来派といったヨーロッパの芸術思潮が、次々と日本へ流れ込んできました。新しい芸術の動きは、金工界でも大きな関心を集めており、一九二六年、ヨーロッパ帰りの津田信夫に影響を受けた高村豊周らによって、個人の表現を追求した「无型」が結成されました。一方で、一九三〇年、香取秀真らにより古典研究を目的とする「七日会」が設立されます。

もともと画家を目指していた長野ですが、この頃、鑄金家へ転身し、一九二三年、山本安曇に師事して鑄金を修得すると、一九二八年より、香取のもとで鑄造技法や日本金工史を学んでいきます。新しい時代の流れの中で、山本、香取の指導を受け、自

身も「七日会」に参加したことは、長野の造形に影響を与え、同時に、古典研究へ進むきっかけになったと考えられます。

これまで当館が収集した長野の作品は、そのほとんどが《松林の凶肩衝釜》をはじめとする茶の湯釜であり、置物は初めての収蔵となります。これは、長野がその生涯において茶の湯釜を主要なテーマとしていたことに関係しています。一九二九年頃から、茶の湯釜の古典研究に取り組み、古典的な造形様式に基づく芸術性豊かな現代釜を確立し、一九六三年に重要無形文化財「茶の湯釜」保持者の認定を受けます。そして、一九七三年から一九七五年にかけて、研究の集大成ともいえる『茶之湯釜全集』(全十巻、駈々堂出版)を発表しています。

茶の湯釜制作において長野は、古典に学びながらも、現代的な感覚を重視した表現を目指しました。その中で、「造形とは自己の理想美の上に作品を添えさせる、そのプロセスのようなもので、最後には余す処なく器が、自己に足るようであればならない」とし、制作・検討・改作を繰り返すことで一つの作品を作り上げていきます。本作は茶の湯釜ではありません。しかし、モチーフの特徴を取捨選択し簡潔に処理した造形の端々には、情性による制作を恐れ、常に厳しく自身の作品を見つめ続けた、長野の誠実な制作姿勢があらわれています。(工芸課客員研究員 成田暢)